

オンラインミュージックビデオの開発
 THE DEVELOPMENT OF ONLINE MUSIC VIDEOS FOR ELEMENTARY-LEVEL
 JAPANESE

西村裕代, エール大学
 Hiroyo Nishimura, Yale University

1. はじめに

歌が言語を習得する上で効果的であるということは広く認識されており、母国語や外国語等の言語教育だけでなく、テレビコマーシャル等でも消費者に商品名を記憶させる為に利用されている。特にシンプルで覚えやすく繰り返しの多い歌、またはよく知られているメロディーを使った替え歌では、様々な言語要素が記憶に残りやすいと言われている (Wallace, 1994; Murphey, 1992; Kind, 1980; Williams, 1983)。また、音楽を聴き歌詞を歌うことと同時に、映像や画像を見て視覚を刺激したり、物理的に体を動かしたり等、様々な感覚を刺激することで記憶は一層強化される (Jolly, 1975; Medina, 1993; Rose & Nicholl, 1997)。

日本語教育でも、日本の童謡、歌謡曲、Jポップ等を使用している教材はあるが、日本で一般的に耳にする日本の歌をそのまま使う為には、学習者の言語レベルを考慮しなければならず、特に初級学習者には導入する歌に出てくる未習文法や語彙、文化背景等追加説明が必要となり、学習目標を達成する前にそれらが負担になる場合がある。また、歌を使って日本語を学ぶことを目的とした出版物やウェブサイトもあるが、映像を伴った教材は多くはないようである。

そこで、本稿では上述の問題を改善すべく、言語レベルが限定されている初級学習者を対象に、学習目標にしている言語要素 (発音、文法、語彙等) を習得することを目的としたミュージックビデオの開発プロジェクトについて述べる。使用したメロディーは上記の誰でも知っているもの、またはシンプルで繰り返しが多いものを選択し、同時に学習目標となっている言語要素を含む歌詞を作詞、その歌詞に付随する視覚教材を作成、そして音声を入れるといった一連のビデオクリップの作り方と、その使用方法や実験結果、学習者の反応等実践報告を行う。

2. 先行研究・先行実践

2.1 歌 (音楽) と言語習得

歌が母国語でも外国語でも言語習得上役に立つというのは、古くから認識されており、Sposet (2008) に集約されているように、様々な外国語教育で研究や実践が報告されている。

サジェストロジーの提唱者である Lozanov (1978) は、音楽はより多くの情報を吸収し記憶する為の精神状態をもたらし、年齢や教科に関わらず学習する上で効果的な役割を果たすとし、音楽はより少ない時間とより少ない努力でより多く学習するのに効果があると報告している。

Williams (1983) や Kind (2003) はテキストだけよりもシンプルな曲か誰でも知っている曲、そして Wallace (1994) はシンプルで繰り返しが多い曲ならば、歌は記憶の強化に役立つと提唱し、実験でそれを証明している。その実験では、

バラードの歌詞を朗読で聴かせたグループと、歌って聴かせたグループ、そして、同じメロディーを繰り返し使用したグループと、三つの異なるメロディーを使用したグループの間で、歌詞中の覚えている言葉の量を比較した。結果は、朗読だけよりもメロディーを聴いたグループの方が記憶に残った言葉の量が多く、また、違うメロディーを聴いたグループよりも同じメロディーを繰り返し聴いたグループの方が歌詞をよく覚えていたとある。この実験から、歌詞は朗読だけよりもサンプルで繰り返しが多いメロディーを伴えば、歌は記憶の強化に役立ち、逆に簡単に覚えられないメロディーは歌詞を覚える妨げになると結論づけている。

更に Kind (2003) は慣れ親しんだ音楽と組み合わせた歌ならば、学習の効果が一段と高くなると述べ、SingLing という語学学習テクニックを開発し、英語学習用の『Tune In To English』を出版している。Kind (2003) のアプローチでは習得させたい言語要素を含んだ歌詞を作詞し、それを誰もが知っているメロディーで歌わせる、つまり、替歌を作るのである。学習者はメロディーを知っているわけであるから、余計な負担がかからず、学習したい項目だけに集中できるという利点がある。また、Murphey (1992) は耳に残りやすい (catchy) 音楽であれば、モチベーションも上がり、「the song-stuck-in-my-head-phenomenon」(1990, p. 58) という現象によって言語学要素の多くはより容易に記憶されると述べ、英語学習教材『Music and Songs』(1992) を出版している。

スペイン語教育では Anton (1990) が Contemporary Music Approach を開発し、著者オリジナルの歌を作詞・作曲した。このアプローチでは学習者に学習項目を含む歌を覚えさせた後、学習者も積極的に活動に参加できるように、同じメロディーを使って替歌を作らせるという手法を用いている。

2.2 歌・映像・記憶

歌が言語を習得するのに効果的である、即ち、脳に記憶されるのに有益だということを考える時に、脳の左右半球で情報処理の仕方が異なるということに着目できる。Blakeslee (1980) や Williams (1983)、Rose & Nicholl (1997) によると論理的思考や分析力、数学的理解力、言語活動等、理論的なことに従事する時には左脳の活動が活発になり、非言語的で直感的なことや、音楽を聞いたり、図形を読み取る等、芸術性・創造性に関係することや感覚的なものに従事する時には右脳の活動が活発になると言う。歌 (歌詞) を聞き歌う時は言語の領域が存在するとされている左脳がよく働き、同時に音楽を聴くので右脳も活発になる。つまり、歌が左脳、右脳の「架け橋」(Guglielmino, 1986, p.21) になり、結果、右脳・左脳の両半球を活性化することになるので、それが学習効果を上げることになるのである。Blakeslee (1980) は、脳全体を活性化させること、即ち、両半球の結合が理想の学習状況を作り出すことになると述べ、Williams (1983) は、脳全体の活性化が長期記憶へ繋がるとし、歌うことは学習者の興味を惹くので、記憶が長持ちすることに繋がると論じている。歌うことが退屈な作業を楽しいものにし (Jolly, 1975)、学習者の興味を惹きつけ持続させることができるのである。更に Salcedo (2010) は、音楽は記憶の効果を高めるだけでなく、脳がその記憶した情報を引き出す為の有効な手段であると述べている。

また多くの研究者が様々な感覚を最大限に活用することが学習の最良の方法だと述べている。Rose & Nichol (1997) は記憶の鍵は「Visual, Auditory, Kinesthetic」であり、その三つを駆使して覚えることを「the VAK attack strategy」と名付けている。Lake (2002) や池谷 (2010) は言語にリズムやメロディーを加えることは言葉を長期的に記憶させることに繋がり、更に映像やイメージを付加することで、音楽は学習効果を高める優れたツールになると論述している。また Jolly (1975) と Garnett (2005) はその視覚を刺激する物が人目を引くもので、色彩豊かな物であれば、教材としての効果が一層発揮されると述べ、池谷 (2010) は視覚、聴覚と併せて、他の感覚、つまり、手を動かして紙に書き、声に出して何度も復唱するということに、五感を最大限に活用して記憶することが学習の近道だとし、単に知識としての記憶ではなく、個人の経験と結びつけて頭に焼き付ければ、記憶が長期間維持できると説明する。

Medina (1993) は第二言語での語彙習得において、音楽とイラストを使用した効果を調べる実験を行った。その実験では四つのグループ（音楽とイラストの両方を使用したグループ、音楽は使用せずイラストだけを使用したグループ、イラストは使用せず音楽だけを使用したグループ、音楽もイラストも使用しなかったグループ）を作り、語彙習得の成果についてグループ間での比較を行った。その結果、音楽とイラストを使用したグループが、他のどのグループよりも語彙テストでの平均点が高いということが判明した。この実験から音楽とイラストの相乗効果が最高の学習効果を引き出すという結論に到っている。

これらの手法は既に我々の身の回りで日常目にするものである。例えば冒頭で述べたテレビコマーシャルはその典型で、音楽（歌）と映像を駆使して我々の感覚を刺激し、商品の名前とイメージを脳に植え付けようとしている。また幼児向けの教育番組や教材等にも同様の手段が用いられている。

2.3 日本語教育における歌教材

日本語教育で出版されている、歌を使用した教材、またはインターネット上で見られる教材は以下の通りである。これらの多くは日本独自の既存の歌を使い、その歌詞の中にある文法や語彙を教えるといった方法を用いている。ただ既成の歌は、言葉、文法、文化的背景等、教師が教えたいと思っている以上のものが含まれていることが殆どであるので、それに対しての説明が必要となる。例えば、寺内 (2001) の『歌から学ぶ日本語』にはいわゆる日本人なら誰でも知っている童謡や歌謡曲が採用されている。これらの歌は、学習者のレベルを選べば有効な学習手段であり、日本の文化やその歌ができた社会背景等も同時に紹介できる利点もある。しかし、上述したように、学習目標になっている文法や語彙に加え、その歌詞を理解させ歌う為に必要な文法・語彙を覚えさせる必要があることを考えると、初級学習者、特にコースの一学期目では学習者の負担になる可能性が大きい。更に日本人には馴染みがある曲でも日本語学習者にはそうでないことも考えられるので、学習項目に加えてその曲のメロディーも覚えなければならないという二重の負担が課される可能性は否めない。

同様に Bell (2001) の『Songs That Teach Japanese』や日本語横町の『日本語でうたおう!』、『日本の歌』等のウェブサイトは日本語学習者の為に作られているが、使われている歌は殆ど日本独自の歌で、必ずしも学習者が知っている歌だとは限らない。一方、Graham (2000) の『GenkiJapan!』にある「Learn Japanese with Songs」で使われている曲の殆どは、日本の歌や慣れ親しんだ曲ではないが、単純なメロディーやリズムで繰り返しが多く、加えて語彙のイメージを映像で見せることによって、必要な情報だけが学習者の記憶に残るように作られているものが多い。語彙レベルの歌が殆どだが、聴覚と視覚の両方に訴えるビデオである。

吉田 (2006) も著書『日本語で歌おう!』で日本の有名な歌や人気のある歌を採用しているが、既存の歌には普段使われないような難しい語句が含まれていることが多いということを確認し、上記の歌に加えて著者が独自に作った日本語の練習の為の歌も掲載している。その歌には日本語教育で頻繁に扱うテーマや語彙や文型が学習順序に沿って導入されており、メロディーは話し言葉のそれとできるだけ近いイントネーションやアクセントになるように配慮されている。また文化的なことや日本語の授業では特に教えられていないが日常使われている表現等も含んでいる。この本の日本語の練習の為の歌は学習項目を中心に歌詞が作られているという点で非常に有効であるが、著者オリジナルの曲という点で上述と同様メロディーも覚えなければならない負担があるということは無視できない。

西川 (2011) の『新日本語歌はじめ：日本語学習者のための歌』は著者が作詞・作曲したオリジナルの歌だけで構成されている。歌には主に初級の学習項目が取り扱われ、また歌詞から日本の文化を知ることができるように工夫されている。また学習者も替歌が作りやすいように穴埋め問題があり、CD も替歌が歌えるよう、歌入りとカラオケ用の二つがある。繰り返しが多く耳に残りやすい曲という面では工夫はされているが、上述同様オリジナルのメロディーを覚える必要がある。

以上の教材では日本独自の歌や著者オリジナルの歌を使っているものが殆どで、一般的にどこの国の人にも知られている音楽を使った教材は少ないようである。

3. プロジェクト概要

3.1 プロジェクトの目的と開発

上記の出版物やウェブサイトも使い方次第では非常に有効であるが、更に効果的な記憶が期待される映像が付随しているものは殆どなく、新しいメロディーを覚えるという負担がかかるものも多い。また初級後半から中級以上になれば、未習の語彙や文法が出て来ても、柔軟に対応できる能力と精神力が養われているであろうが、初級、特に初級前半では全てが新しいものへの挑戦であるので、なるべく必要なものだけに限定したい。そこで言語レベルが限定されている初級学習者を対象に、学習目標にしている言語要素を習得することを目的として開発したのが『Japanese Through Music』である。メロディーは Kind (2003) や Williams (1983)、Wallace (1994) が提唱している誰でも知っているもの、またはシンプルで繰り返しが多いものでほぼ構成し、Murphey (1992) の言う、覚えやすい (catchy) ものになるように考慮した。歌詞はなるべく学習目標となっている言

語要素だけになるように作詞し、無理なく楽しく習得できるよう配慮した。メロディーと伴奏作成にはそれぞれ Sibelius と Band-in-a-Box を用い、歌声は録音、または「初音ミク」「巡音ルカ」「miki」等の音声合成システム VOCALOID で作成した。

また、視覚を刺激することも記憶の助けになるということを念頭に、その歌詞に付随する視覚教材を作成し、iMovie で音楽、歌、映像を編集した。視覚教材は Jolly (1975) と Garnett (2005) が提唱するような目を引く色のもの、アニメーションになっているもの等様々である。そして記憶強化の為に、聴く(聴覚)、見る(視覚)、書く(手の運動)、歌う(声に出す)、自分の歌詞を作る(創造、経験)等なるべく多くの感覚を使うような宿題を作成し、学習者自身が楽しくアクティブに学べるような教材になることを指標とした。

3.2 ミュージックビデオの内容・実践例

以下完成した 11 のミュージックビデオと学習項目である。

ミュージックビデオ	学習項目
「なんですか」“What is it?”	発音：イントネーション
「本が一冊あります」“There Is a Book”	語彙：助数詞
「て-form song」“Gerund Form Song”	文法：テ形
「スミスさんの一週間」“Mr. Smith’s Week”	語彙：曜日
「日付の歌」“Calendar Song”	語彙：日付
「家族の歌」“Family Song”	語彙：家族用語・助数詞(人の数え方)
「切って、聞いて、来て」 “Cut, Listen, Come -Verbs that Sound Similar-”	発音：促音、長母音
「となりのおばけ」“The Ghost Next Door”	文法：自動詞・他動詞
「日本語が上手になりたい人は・・・！」“If You Want to Master Japanese...!”	文法：意向形
「体の歌」“The Body Parts Song”	語彙：体の部位
「止まらなくちゃ！」“The Rule of the Road”	文法：許可・禁止・義務

これらのミュージックビデオを、文法の導入、予習、復習、文法・新出単語の練習問題、聴解練習、書き取り問題に使用した。書き取り問題に使ったビデオの映像には空欄を含んだ字幕を付け、聴き取った言語要素を書く穴埋め問題にした。

例えば意向形の学習を目的とした「日本語が上手になりたい人は・・・！」(「幸せなら手をたたこう」スペイン民謡)では予習としてまず自宅で視聴してくる。字幕に出てくる歌詞の意向形の箇所は空欄になっており、聴いて意向形を書き取り、全歌詞が載っている答えバージョンのミュージックビデオを見て答えを確認する。その後、同じメロディーで学習者が自分の歌詞を作詞する。次の日の授業では、まず全員で書き取りをしてきた歌を歌い、そして、学生に自分の作詞した歌詞を発表してもらい、一緒に歌う。

「体の歌」ではよく知られている子ども向けの英語の歌「Head, Shoulders, Knees and Toes」を採用し、語彙はオリジナルの歌にある「頭、肩、膝、爪先」に加え、学習者に習得して欲しい語彙も追加した。歌詞のスピードを徐々に上げ

て三回繰り返す形で、いろいろな感覚の使用が記憶力を高めるということに基づき、学習者に自分の体の部位を触ってもらいながら歌った。またイラストは学習の過程で「兄」や「お兄さん」とよく混同される「鬼」を採用し、鬼の体の部位の穴埋め問題を完成させることを宿題とした。

許可・禁止・義務の文型練習を目的とした「止まらなくちゃ！」（「Old MacDonald Had a Farm」米国童謡）では車を運転して進んで行くうちに、してもいいこと、してはいけないこと、しなくてはいけないこと、しなくてもいいことが次々と出てくるストーリー性のある映像を作成した。学習者はまず自宅で視聴し、ビデオの内容に関して質問に答えてくるのが宿題である。内容質問の後、学生は続きの映像を見、それについて自分で作詞してくる。それを次の日の授業で歌う。車の運転という身近な題材で、池谷（2010）の言うように、自分の経験と結びつけて覚えやすいよう考慮した。

自動詞と他動詞を習得する目的で作成した「となりのおばけ」ではそれぞれの動詞の辞書形に加え、テ形も習得できるように、また、対に並べることで覚えやすいような歌詞を作り、その歌詞に合ったイラストを作成し、印象に残るよう配慮した。このミュージックビデオでは穴埋めの歌詞を完成させるとともに、自動詞・他動詞のマス形、辞書形、テ形の表を完成させる宿題も課した。メロディーはこのビデオのみ日本の童謡「ずいずいずっころばし」を編曲し採用した。

イントネーションを扱う歌「なんですか」ではピッチの高低が視覚でも分かるようにし、メロディーは唱歌「蝶々」（ドイツ童謡）を基本に編曲した。これも繰り返しが三回あり、スピードを徐々に上げていくが、メロディーに合わせて歌ったものと、メロディーを付けずに会話だけの部分も含んだ。メロディーの変化が会話のピッチの変化と対応していることを認識させる為である。

頻繁に混同し、定着が困難な動詞のテ形の発音（聴き取り）習得を目的に作成した「切って、聞いて、来て」においては、混同するテ形の違いを歌詞に盛り込み、歌いながら発音とテ形の作り方の両方を学習できるように配慮した。以下「切って、聞いて、来て」を使った実験の報告である。

4. 実験報告

対象は米国私立大学の初級日本語コース（週5時間50分授業）を履修している38名で、高校で勉強した経験がある数名の学生を除き、日本語を勉強するのは初めての学生である。使用したミュージックビデオは上記の「切って、聞いて、来て」で、実験は2012年の秋学期開始後、約5週目にPre-test 1を、6週目にPre-test 2、7週目にPost-testを授業内で行った。今回は教育的配慮から比較対照する統制群は作らず、全員同じ実験を受け、各学生のテストの点数が伸びたかまたは維持できたか、つまり、間違えやすい動詞のテ形が聴き取れるか、聴き取れるようになったかについて調べた。また通常行われるプリテストの形ではなく、テ形を授業で導入した後でのテストになるが、「切って、聞いて、来て」に出てくる動詞はいずれも導入され練習した後でも発音や形が定着しにくい動詞であることを踏まえ、ここではミュージックビデオ使用前に実施した二つのテストをPre-test 1、Pre-test 2と呼ぶ。Pre-testとPost-testは、八点満点の選択式で、学生

は発音が間違えやすい動詞のテ形を音声で聴き、三つの選択肢から聴き取った動詞が表記されているものを選ぶ。

手順は以下の通りである。Pre-test 1 の約二週間前に授業でテ形が導入され、その後日本語クリニックという授業外活動で、学生全員個別に間違えやすい促音・長母音等の発音指導を行う。そして Pre-test 1 を実施した一週間後、Pre-test 2 を行う。その後一週間、毎日上記のミュージックビデオを課題として自宅で視聴させ、Post-test を行う。テストの平均点は図 1 の通りである。ここで満点を取得した学生数に着目する(図 2)。Pre-test 1 を行ったときは、63%の学生(24名)が満点だったが、これはテ形が既に導入・練習されているので予測の範囲に入る。また Pre-test 2 では 84%の学生(31名)が満点を取ったが、テストを実施した直前の授業活動にテ形が含まれていたことに起因する可能性もある。ここで注目したいのは、Post-test ではその 31 名が点数を維持しただけでなく、残りの 12%の学生(5名)も満点を取得し、100%に近い 96%の学生が満点を維持・取得したということである。

図 1 聴解テスト平均点

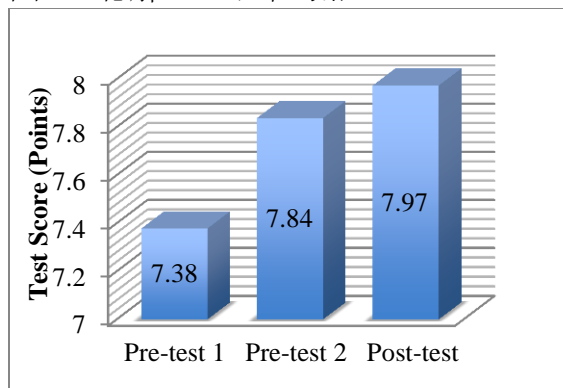
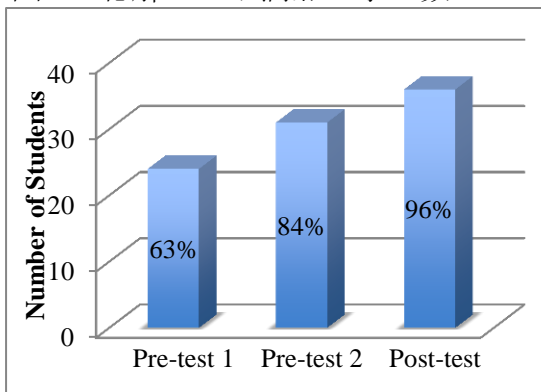


図 2 聴解テスト満点の学生数



例年、テ形の発音や形を間違えやすい動詞は、授業での導入後、そして続く日本語クリニックでの練習後も、その場での短期的な記憶は可能だが、その後記憶が低下する傾向にあった。ところが、今回ミュージックビデオを一週間見せたことにより、聴き取る力が維持でき、更に正しいテ形の発音を聴き取れるようになった学生も増えた。無論、この実験以外の相乗効果を生んだ環境が存在した可能性も否定できないが、それでも今回のこの結果はミュージックビデオの使用が学習効果を高めたということの一つの裏付けになるのではないだろうか。実際学生は後日もこの歌をよく歌い、頭に残った (stuck in my head) と述べている。

5. アンケート調査の結果・考察

ミュージックビデオを作成し始めた 2008 年から 2013 年に於いてほぼ毎学期 (2008 年春、2008 年秋、2010 年春、2010 年秋、2011 年春、2011 年秋、2012 年春、2012 年秋、2013 年春の合計九学期) 上記の私立大学初級日本語コースの学習者延べ 317 人を対象にミュージックビデオを使用した宿題についてのアンケート調査を行った。全体評価、満足度、効果、宿題の長さ・頻度の満足度、重要性

を段階評価で、良かった点と改善すべき点を記述式で答えてもらった。結果は図3にあるように、全体評価として93%の学生が肯定的な反応（Excellent 48%、Good 45%）を示している。特に2012年度はExcellentが54%と過半数を超え（図4）、肯定的反応は合計94%に昇り、満足度や効果についても、例年より高い評価を得た。これは以前収集した意見を反映した結果であろうと推察する。

図3 2008年春～2013年春学期までの評価

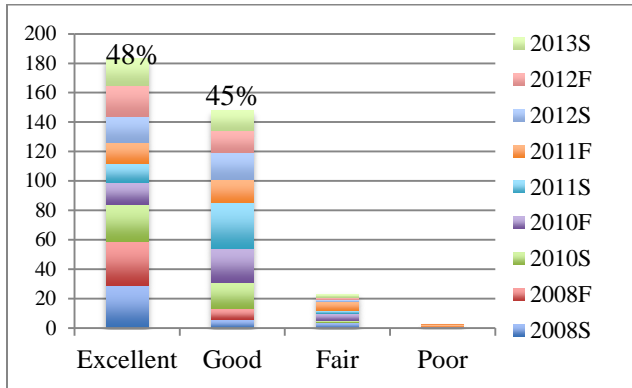
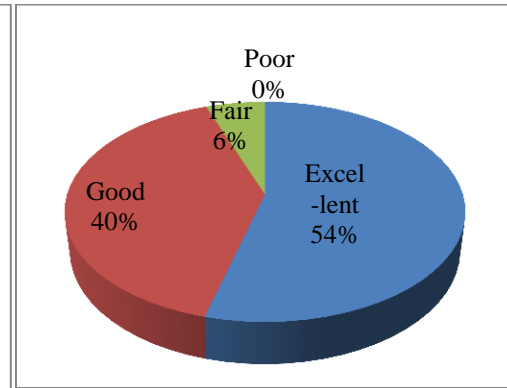


図4 2012年度の評価



2012年春学期から2013春学期においては、それぞれのミュージックビデオが目標にしている言語要素を学習するのに実際に役立ったかということ調べる為のアンケート調査を行い、個々のミュージックビデオについて、暗記、聴解、発音、スピーキング、文法の中で、効果があったと思われる分野を選択してもらった。但し選択する分野は一つに限らずとも良いとし、役に立ったと思う分野全てを選択するよう指示した。結果は、語彙学習を目標にしているミュージックビデオは全て語彙暗記に役に立ったという反応が最も多く、次いで聴解、発音、スピーキング、文法と続いた（図5）。また、文法学習を目標にしているミュージックビデオについても、文法学習に効果的だったという反応が最も多く、次いで暗記または聴解練習に役に立ったという反応が多かった（図6）。発音習得を目的としたミュージックビデオの反応も、発音習得の役に立ったという反応が一番多く、聴解練習や暗記の役に立ったという反応が2番目に多かった。特にイントネーション習得を目標とした歌はイントネーションの他に、聴解練習とスピーキングにも有益だったという反応が多数いた（図7）。

図5 分野別効果（目標：語彙暗記）

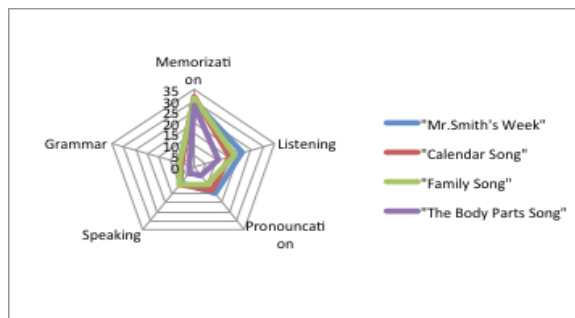


図6 分野別効果（目標：文法）

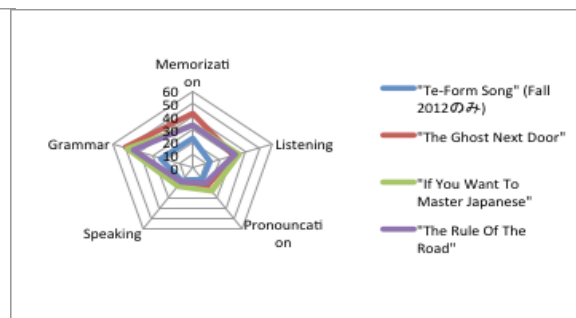
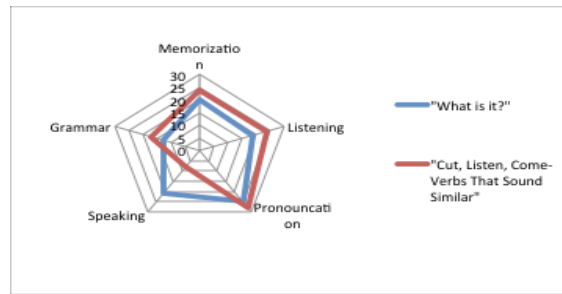
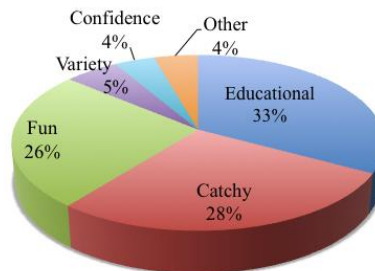


図7 分野別効果（目標：発音）



また 2010 年春学期から 2013 年春学期にかけて、ミュージックビデオを使った宿題で何が良かったかという質問には、図 8 にあるように、33%の学生が「語彙、文法、発音や聴き取り等の学習に役立った」と答え、28%の学生が「catchy」、
「stuck in my head」、26%の学生が「楽しい」というコメントだった。その他
「バラエティがあつていい」、「自信がついた」、「もっと学ぶ気になった」、
「難しいがやりがいがある」、「達成感がある」等のコメントもあった。「他の宿題やテスト時に役に立った」というコメントもあり、教室を出て行く時に授業で歌った歌を口ずさみながらいく学生もいたので、Murphey (1990) の「the song-stuck-in-my-head-phenomenon」が起こったと言えよう。また「繰り返しが多いから覚えられる」という肯定的な意見の人が大多数の一方で、「繰り返しが多いから嫌だ」、「忘れられないから嫌だ」という学生もいた。

図8 What did you like most about the music video assignments?



6. 今後の課題

プロジェクトの初期段階では宿題にはしたがカリキュラム上授業内で歌う時間を必ずしも設けられなかったり、付随する宿題がないビデオもあったりと、ミュージックビデオを十分に活用できなかった時もあったが、そういった反省点を踏まえ、問題を改善し、授業に密接になるように導入することで、今年度の学生の反応は例年より一段と良くなった。他の語彙や文法項目のミュージックビデオも作って欲しいという要望も出てきている。そういった要望を踏まえ、今後の課題として、更に別の文型項目を練習する歌、文化的な要素が入ったもの、そして発音練習の歌を作成していきたい。また今回の実験では混同しがちなテ形の聴き取りができるようになったかということについて調べたが、聴き取りだけではなく、実際の発音やイントネーションの向上に関しても歌の有効性の有無を研究したい。

参考文献

- 池谷裕二 (2010) 『脳の仕組みと科学的勉強法』 ライオン社
- 寺内弘子 (2001) 『歌から学ぶ日本語』 佐々木倫子監修 アルク
- 西川格 (2012) 『新日本語歌はじめ：日本語学習者のための歌』 大谷書店
「日本語でうたおう！」日本語横町 *for Japanese-Language Teachers and Learners*,
<http://homepage1.nifty.com/netsuma/workshop/uta/index.html> (参照 2010-3-14)
- 吉田千寿子 (2006) 『日本語で歌おう！』 ASK
- Anton, Ronald J. (1990). Combining singing and psychology. *Hispania* 73, 1166-1170.
- Bell, Carolyn. (2001). Songs that teach Japanese. *Japanese Language Teachers Network Quarterly Teaching Materials*, 16(5). Retrieved from
<http://www.japaneseteaching.org/projects/JLTNQ/songs/> (参照 2010-3-14)
- Blakeslee, Thomas R. (1980). *The right brain: A new understanding of the unconscious mind and its creative powers*. Garden City: Anchor Press/Doubleday.
- Garnett, Steve. (2005). *Using brainpower in the classroom: Five steps to accelerate learning*. London: Routledge.
- Graham, Richard. (2000). "GenkiJapan.net." <http://genkienglish.net/genkijapan/menu.htm>
(参照 2013-8-7)
- Guglielmino, Lucy M. (1986). The affective edge: using songs and music in ESL instruction. *Adult Literacy and Basic Education* 10, 19-26.
- Jolly, Yukiko S. (1975) The use of songs in teaching foreign languages. *The Modern Language Journal* 59(1/2), 11-14.
- Kind, Uwe. (2003). *Tune in to English: Learning English through familiar melodies: SingLing and LingoRap*. McHenry: Delta Publishing Company.
- Lake, Robert. (2002). Enhancing acquisition through music. *The Journal of the Imagination in Language Learning and Teaching VII*. Retrieved from
<http://www.njcu.edu/cill/vol7/lake.html> (参照 2010-3-14)
- Lozanov, Georgi. (1978). *Suggestology and outlines of Suggestopediy*. New York: Gordon and Breach Science Publishers.
- Medina, S. L. (1993). The effect of music upon second language vocabulary acquisition. Retrieved from ERIC Document Reproduction Service No.ED 352-834.
- Murphey, Tim. (1992). *Music and song*. Oxford: Oxford University Press.
- Murphey, Tim. (1990). The song stuck in my head phenomenon. *System* 18 (1), 53-64.
- Rose, Colin, & Nicole, Malcolm J. (1997). *Accelerated Learning for the 21st Century: The Six-step Plan to Unlock Your Master-mind*. New York: Dell Publishing.
- Salcedo, C. S. (2010). The effects of songs in the foreign language classroom on text recall, delayed text recall and involuntary mental rehearsal. *IABR & ITLC Conference Proceedings*. Orlando, FL.
- Sposet, Barbara A. (2008). *The Role of Music in Second Language Acquisition: A Bibliographical Review of Seventy Years of Research, 1937-2007*. Lewiston: The Edwin Mellen Press.
- Wallace, Wanda T. (1994). Memory for music: effect of melody on recall of text. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 20, 1471-1485.
- Williams, Linda V. (1983). *Teaching for the Two-sided Mind*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc.